

# Global Discussion

## 国内留学を目指して

英語科 真木 啓生

平成26年度に本校がSGH指定校となり、英語科は教科SGH化としてGlobal Discussionという取り組みを始めた。この取り組みは本校一年生全生徒を対象とし、金沢大学から招いた留学生と定期的に英語で意見交換をするというものである。留学生は英語母語話者ではないため、本校生徒は国際語としての英語の利便性を理解し、使いこなす姿勢を学ぶことができているようだ。本稿では、平成26年度と平成27年度の取り組みを比較することで、4技能統合型のアクティヴ・ラーニングにおける指導方法や評価の問題点を浮き彫りにし、指導計画などの在り方を見直し、改善策を考察した。また、留学生派遣における大学との連携など、より多くの高等学校がよりスムーズに実践できるような高大接続の模索を試みた。

キーワード：異文化交流 教科SGH化 評価方法 高大接続

### 1. はじめに

本稿は、平成26年度8月から2月にかけて行った第一期Global Discussionの実践報告と、平成27年度9月より行っている第二期Global Discussionの中間報告である。

### 2. Global Discussionについて

#### (1) 研究目的

SGH申請時にはGlobal Discussionの目的を「様々なトピックに関して、本校生徒が外国人留学生を相手に、お互いの国での状況について情報交換することを通して、口頭での英語の運用力を高めると同時に、グローバルなものを見方を身につける。」とした。私個人としては「国内留学」をテーマとし、元々ALTとのチームティーチングだった授業に定期的に留学生を招くことで、本校生徒がより自然な場面設定で、より多くの英語コミュニケーションの機会を得ることが出来ることをねらいとした。数値化は難しいかもしれないが、自分とは異なる文化的背景をもつ人たちと直接触れ合うことで、異文化

に触発され、生徒個人の価値観が変容したり、将来のキャリアに対する内発的動機づけが高まったりするような体験になることを期待して「国内留学」をテーマにした。

#### (2) 授業概略

本授業は一年生の英語表現Iの時間に実施し、第一期(平成26年度)は夏期補習(8月下旬)から、第二期(本年度)は2学期(9月下旬)から開始した。以下、第一期と第二期を分けて、それぞれ概略を記す。

第一期：2学期と3学期で全9回のGlobal Discussionを行った。各回でトピックを設定し(資料1)、留学生との話し合いと発表を1セットとし、隔週で留学生を招いた。生徒は、ワークシートをもとにトピックについて事前に下調べをして、留学生との話し合いの授業に臨んだ。毎回6~10名程度(多い時には20名超)の留学生に参加してもらい、留学生の参加人数に合わせてグループ分けし、各グループにタブレット端末を2台ずつ配備した。授業は前半と後半

で区切り、各班が毎回2人の留学生と話し合った。後述の通り、留学生は英語母語話者ではなく、また、それぞれの文化的背景も異なっていたため、生徒は全9回を通して多様な文化に触れる機会を得ることができた。留学生と話し合った後の授業では、話し合った内容をポスターやプレゼンテーションにまとめ、各グループがそれぞれ英語で発表を行った。評価シートを作成し、生徒と日本人英語教員、ALTが各グループの発表を評価した。

第二期：2学期終了時点で3回のGlobal Discussionを行っている。基本的には第一期の流れを踏襲しているが、第二期は「準備→話し合い→発表」を1セットとし、3週間に一度のペースで留学生に来てもらっている。3学期までに5回を計画している。

### (3) 留学生について

留学生は金沢大学に所属している生徒を派遣してもらっている。英語母語話者は含まれておらず、英語のレベルも募集の段階で制限していないため、あまり流暢でない人もいる。しかし、本校生徒には、第二言語としての英語でコミュニケーションできる喜びと、第二言語としての英語を駆使する際の姿勢も学んでもらいたいので、敢えてネイティブ・スピーカーは招いていない。

第一期：第4回までは金沢大学の各大学院に正規所属の留学生を招いた。大学から高校までの移動はタクシー。第5回以降は短期留学プログラム所属の留学生に移行した。大学事務部でピックアップしてもらった留学生のリストをもとに、授業担当者がメールで各留学生と連絡を取って参加者を決定した。留学生には特別な指示はなく、視覚教材があれば好ましいこと、日本語が堪能な人には使用しないことを伝えたのみである。ALTからは、生徒が発言しようとしていたら、辛抱強く待つようにという助言があった。どの留学生も授業には非常に協力的で、すべての生徒を順番に指名して、発言機会を与えるよ

う工夫するなど、すばらしいファシリテーターを務めてくれた。

第二期：金沢大学人間社会学域の大学院に所属している留学生に来てもらっている。人間社会学域の事務が留学生を統括してくださっている。大学から高校までの移動は大学バスを出してもらえるようになった。

### (4) 大学との連携

第一期はそれぞれ異なる所属先から多くの留学生に参加してもらったため、多くの関係機関にご協力いただいた。特に、金沢大学国際機構副機構長であり留学生センター長でもある大谷吉生教授には多くの大学院生を紹介していただき、また、国際機構の斉木真理子教授には多くの短期留学生を派遣していただいた。資料にもあるように、多様な文化的背景をもった多くの留学生が参加してくれたことで、本校生徒はさながら国内留学気分を味わえたのではないと思う。

第一期では、大学事務側に留学生を統括する機関がなかったため、事務手続きや連絡のやりとりを本校事務や授業担当者が個別にやりとりせざるを得ない状況があった。第二期からは人間社会学域事務で留学生を一括して対応してもらえる体制が整った。

## 3. 考察：改善と課題

本年度の第二期Global Discussionは昨年度の第一期Global Discussionを改善しながら実施している。依然として課題も多いが、具体的な改善点と課題を挙げながら、これまでのGlobal Discussionを振り返り、今後の方向性を考察したい。

### (1) 目的と評価

先述の通り、この取り組みは「様々なトピックに関して、本校生徒が外国人留学生を相手に、お互いの国での状況について情報交換することを通して、

口頭での英語の運用力を高めると同時に、「グローバルなものを見方を身につける」を目的として始まった。豊富な語彙をもち、瞬時に複雑な構造の文章を正確に組み立て、流暢に話せたとしても、英語母語話者を前にすると尻込みしてしまう学生は本校にも少なくない。同時に、簡単な単語の羅列に過ぎないような単文を、ジェスチャーやフェイスチャール・エクспRESSIONなどと組み合わせながら楽しそうに交流できる生徒も少なからずいる。

こういった光景は、今のどの世代のどのコミュニティーの日本人にも当てはまる事例だろう。単語や文法という知識をどれだけ正確に、大量に詰め込んでも、最後は「どれだけ異文化に触れたか／場数を踏んだか」の差が少なからずコミュニケーションに影響するのは間違いない。そんな思いからこの取り組みは始まった。日本の高校にいながら、異文化を体験できる環境づくりを目標に、私は「国内短期留学」を本取組のテーマにしている。

第一期と第二期を担当してきて、私の実感としては概ね先の目標を達成できていると感じている。最初は機関銃のように浴びせられる留学生の“訛りのある”英語に戸惑い、黙って聴いているだけしかできなかった生徒が、回数を重ねるにつれ、少しずつ自分から質問できるようになり、会話のターンテイキングもスムーズになっていく様子を目の当たりにすると感動に近いものを感じることもある。

しかし、同時に「評価」という問題に直面している。この取り組みの目的である「口頭での英語の運用能力の高まり」や「グローバルな視点の獲得」はどのように評価できるだろうか。現在は話し合いをもとにした発表（ポスター発表やプレゼンテーションなど）を評価対象としている。彼らは留学生から見聞きしたことを上手にまとめることができている。発表をみていると、それまで知らなかった知識、その国の人に聞かなければわからないような情報を確かに獲得していることがわかる。しかし、それらは

決して「グローバルな視点の獲得」とイコールではなく、「口頭での英語の運用能力の高まり」を示すものでもない。本授業が目的としているのは発音の流暢さや聞き取りの正確性といった個別の技能ではなく、（場合によっては、相槌や視線などの言外の能力も含めた）4技能統合の力のひとつであるので数値化が難しく、現在はポートフォリオ評価やルーブリック評価なども検討中だが、まだ結論には至っていない。

このまま発表だけを評価し続け、生徒がポスター発表やプレゼンテーション（＝原稿ありきの／非4技能統合型英語活動）にのみ注力し、留学生とのコミュニケーションやプレゼン後の質疑応答などの即興型の英語活動を軽視するようになってしまうことを避けるためにも、一刻もはやく適切な評価方法を開発することが最優先課題である。

## (2) 授業の計画

第一期 Global Discussion は場数を踏むことを優先し、とにかく異文化に接する機会を増やそうと隔週で留学生を招いた。そのため授業として下調べの時間を取ることができず、課題としてワークシートを与えていたが、生徒間で準備量の差が大きく開くかたちとなった。実際に留学生と話す段になって、話す内容を掘り下げることができていない生徒も多くみられた。そのため、まとめとして行っていた発表も、内容的に深まりがみられず、取り組みの重点が留学生と交流することだけに置かれてしまっていた。そこで第二期では、留學生徒の交流頻度は下がるものの、準備のための時間を設け、留学生との交流を「発表のためのインフォーマントとの交流」という位置づけにし、交流の目的を第一期とは違うところに置かせた。

準備の時間に生徒に何をを用意させるべきなのかについては、議論が別れるだろう。私はALTと相談し、授業ではとにかく話す練習をさせることとし、

トピックに関する知識については第一期同様、当日までの課題とすることにした。

留学生を招く前の1学期の段階では、毎回簡単な英文を2種類用意し、ペアでRetelling活動を行った。

2学期からの授業では、トピックとそれに対する誰でも思いつくような簡単な質問を2つほど載せたワークシートを用意し、まずは、他に尋ねてみたい質問を2つほど考えさせた。その後、ペアでお互いに質問しあう活動を行った。第一期では、単にお互いの国の現状を伝え合うだけのやりとりで終始していたが、第二期では留学生との交流を「インフォーマントからの情報収集」という位置づけに変更したので、「自国の情報を伝えるだけ」の一方向のやりとりではなく、「相手に質問を投げかけることで情報を引き出す」という双方向に近いやりとりをする必要性が生まれたため、「質問力」という部分に準備の焦点を当てた。

トピックに関する情報収集に時間を充てるのではなく、ペア活動にしたねらいはふたつある。まず、ペア活動で一度リハーサルしておくことで留学生と交流する際の心理的負荷が軽減されることが期待できる。また、質問が“～ in your country?”と相手国のことを尋ねる形式になっているため、本校生徒どうしでペア活動を行うと自然と日本の文化を英語で説明するリハーサルになるので、「留学生になにか質問されても答えることができる」という自信が生まれ、スムーズな会話につながったようである。

生徒はトピックに関する情報収集を結局日本語で行ってしまうので、授業を調べ作業の時間に充ててしまうと、生徒の英語を使う機会を奪うことになってしまうかもしれない。生徒に調べ学習の時間を与えると日本のことについて質問されることがわかっているため、必死でトピックに関する日本の情報を集めようとして、結果、日本語を使うだけの授業になってしまい、リハーサルができないまま留学生と

の交流に入ることとなる。すると、生徒は日本に対する豊富な知識はあるものの、それを英語で表現することが出来ず、もどかしい思いを抱きながら英語でのコミュニケーションに四苦八苦することとなる。このように、「話したいこと」と「話せないこと」のギャップが大きくなればなるほど、生徒は英語でのコミュニケーションに対する意欲を失ってしまい、調べ学習にどれだけ時間を割いても、留学生との交流という場面設定自体に意味がなくなってしまうのである。

しかし、一度でも日本の説明を英語でリハーサルしておけば、生徒は自身の日本文化に対する知識不足を痛感し、日本文化について調べ、それをどう英語で表現するかも学習しようとする。日本文化について調べることで初めて「海外ではどうなっているのだろう」という疑問が生まれ、それがさらに一歩踏み込んだ質問につながる。本授業の特性上、わざわざ留学生というインフォーマントと話すことができるので、基本的な情報以外には敢えてその国のことを調べたりはさせていない。こういった海外文化に対する関心を高めるきっかけづくりのためにも、最初から調べ学習に入るのではなく、一度ペア活動させる方が、留学生との交流における効果の高まりが期待できると考えられる。

しかし、この活動にも3つの欠点が指摘できる。ひとつは、クラスメイトどうし(=同世代で同じ文化背景を持った者どうし)だと答えが容易に想像できてしまい、回答が予想通りだった場合は会話がなかなか続かず、リハーサルにもならない場合である。本番のためにも、できるだけ質問攻めするよう指導するが、なかなか自発的な質問が思い浮かばないような場面が見受けられることもあった。

また、用意していた質問を留学生に尋ねて答えてもらうことが果たして「口頭での英語の運用能力の高まり」を意味しているのか、という問題がある。生徒が留学生に英語で質問している様子を一見する

と、理想的な交流に見える。しかし、生徒は単に用意した英文を読み上げ、返って来る留学生からの英語に耳を傾けているだけで、留学生に質問したいという本当の意欲は低下してしまっているかもしれない。ひとつの疑問とそれに対する回答が新たな興味を生み出す、といった自然発生的な会話の盛り上がりや阻害してしまっている可能性が考えられる。例えば、日本語で会話している時には些細な疑問に対しても貪欲に質問するような生徒が、英語での会話では、一回のやりとりを成立させることに精一杯になってしまったり、会話が成立したことで安心してしまい、そこから先の興味につながりにくかったりする場面がよくみられる。事前に質問を用意してしまうと、安心感だけが増し、次への興味・関心・意欲につながっていないように感じられる。

最後に、あまりに準備を念入りにさせ過ぎると留学生との交流も、その後の発表も広がりやに欠け、似通った内容になってしまう問題がある。特に留学生は、同じ日に3回の授業でそれぞれ2グループずつと交流するので、計6回同じ内容を話すことになるのだが、同じような質問を何度もされると彼らのモチベーションも下がり、結果的に会話が盛り下がってしまうことが懸念される。先述の通り、留学生はとても指導的であり、非常に巧みに生徒の興味関心を掻き立ててくれている。しかし、生徒はなかなか準備してある“安全な質問”以外の英語に踏み出そうとしない。すると、留学生が一方向的に話す時間が増えてしまうという悪循環が生じる。

ちゃんと用意してあったとしても、留学生を目の前にするとうまく英語を話せない生徒が少なくないという現状がある以上、すべての生徒が消極的になることなく本授業に参加できるようになるためには、やはり事前の準備は必要である。しかし、なにをどう準備させるかについては議論し、精緻化していく必要があるだろう。

### (3) 大学との連携

第一期 Global Discussion には述べ223人(76人)の留学生が参加して下さり、生徒にとってはとても恵まれた環境となった。しかし、所属がばらばらだったために、留学生によって必要書類が異なっていたり、対応が一様ではなかったり、本校事務と授業担当者がそれぞれの留学生と個別に対応せざるを得ない状況だった。私が交わしたメールだけでも500通を超え、各回ごとに50通前後のメールを英語でやりとりするのは骨の折れる作業だった。

第二期を始めるにあたり、金沢大学SGH特区教育センターに指導を仰ぐことで、金沢大学人間社会学域事務との連携体制が整い、本校事務と授業担当者の負担が大幅に軽減された。一例を挙げると、留学生が大学から高校まで移動する際、大学バスの利用や、乗車確認が可能になったため、授業の開始が飛躍的にスムーズになった。また、大学側の事務が留学生と本校の間に入ってくださっていることで、授業担当者が留学生ひとりひとりと連絡を取り合う必要がなくなったことも大きな負担軽減となった。

しかし、第一期と比べると人間社会学域の留学生からのみ希望を募っているため、参加希望の留学生も少なく、文化的背景も狭まっている。40人のクラスに留学生を招くとき、本校生徒と留学生の比率を考えると、10名前後の留学生を招くことが理想である。第一期に、斉木真理子教授が20名を超える留学生を連れてきてくださった時は、生徒の目の色が変わった。

むやみに生徒を窮地に追い込んでしまうと、それだけで意欲を失ってしまうだろうし、ただ単に留学生の数を増やせば効果が高まるというものでもない。しかし、ほとんどの生徒が「英語が伝わると嬉しい」という実感を持ち、また、そこから英語を学ぶ意味を見出しているようである。学年があがり、留学生との交流がなくなって英語学習に物足りなさを感じている生徒も少なくないのではないかと。そういった

英語に対する内発的動機づけの一端をこの取り組みが担っているように思う。これらのことは今後アンケート調査などで追跡しながら明らかにしたいと思うが、生徒のために最適な場面設定を用意できるようにするためにも、大学との連携を深め、授業効果の高い取り組みになるよう改善していきたい。

#### 4. 終わりに

本授業はSGH指定校の教科SGH化という特殊な環境の中での取り組みであり、未だ試行錯誤の段階ではあるが、評価方法や指導計画が精緻化された際には、各高校に応じて活用していただけるような授業プランにできるよう努力していきたいと思っている。「ただ留学生と話させておけば度胸がつく」と

いうだけでなく、異文化を尊重できる態度や、文化的背景や思想の異なる者どうしても合意形成を目指す資質を育みつつ、英語教育としての効果も期待できるような授業を目指したい。そこに至るまでの道筋は現段階で明確に定まっているわけではないので、忌憚のないご意見を賜りながら改善していきたいと思う。例えば、現状では各トピックどうしにつながりはないのだが、体系化することで培われる資質も出てくるだろう。高大接続を強化し、大学と高校の合同授業（例えば、留学生は大学の単位として履修する）というカリキュラムを開発することも可能かもしれない。そうすれば、参加する留学生も増え、様々な高校が自由に連携することが可能になるかもしれない。

資料1 第一期 Global Discussion

日程	TOPIC	留学生	評価方法
8月20日	第1回 DIETARY CULTURE	ロシア/ドイツ/フィリピン/ バングラデシュ/イラン/韓国	グループプレゼン テーション
8月27日			
9月3日	第2回 SPORTS CULTURE	インドネシア/ドイツ/ミャンマー/韓国 バングラデシュ/イラン/フィリピン	グループプレゼン テーション
9月10日			
9月17日	第3回 ENGLISH EDUCATION	インドネシア/中国/ロシア/ドイツ/バ ングラデシュ/イラン/フィリピン/韓国	ポスター発表
9月24日			
10月1日	第4回 ANNUAL EVENTS	中国/ロシア/ドイツ/バングラデシュ/ イラン/フィリピン/韓国	ポスター発表
10月4日			
10月8日			
11月12日	第5回 NAMING	インドネシア/イラン/韓国/マレーシア ケニア/グルジア/ベルギー/ベトナム	
11月19日	第6回 CONVENIENCE STORE	インドネシア/韓国/ロシア/チェコ/マ レーシア/ケニア/グルジア/ベルギー/ ベトナム/スペイン/アルゼンチン/ソロ モン諸島	
11月26日			
1月7日	第7回 BEST PLACE TO VISIT	インドネシア/ロシア/インドネシア/ ベルギー/ソロモン諸島/チェコ/台湾	
1月14日			
1月21日	第8回 THE PRICE GAP	インドネシア/イラン/ロシア/ マレーシア/ケニア	ポスター発表
1月28日			
2月4日	第9回 TRANSPORTATION FEE	インドネシア/韓国/インドネシア/ ベトナム/スペイン/ドイツ	ポスター発表
2月18日			
2月25日			

最終的には全く異なる形式の授業に発展している可能性もあり、また、軌道修正の中で今のスタイルが様変わりしている可能性もあるが、いずれにせよ、

この取り組みが、いずれ地域教育に貢献する実践になることを願う。

資料2 第二期 Global Discussion

日程	TOPIC	留学生	評価方法
9月30日	第1回 NATIONAL FLAG	アルゼンチン2人, インドネシア4人, ロシア1人	ポスター発表
10月7日			
10月21日			
10月28日	第2回 SPECIAL DISHES & DAILY FOOD	インドネシア4人, ロシア1人, 中国2 人, ベルギー・トルコ1人	レポート
11月4日			
11月18日	第3回 NATIONAL SPORTS & LOCAL GAMES	インドネシア2人, ロシア1人, 中国2 人, ベルギー・トルコ1人	ポスター発表
11月25日			
12月2日			
1月13日	第4回 (CONVENIENCE STORE)	インドネシア4人, 中国2人	プレゼンテーショ ン
1月20日			
1月27日			
2月3日	第5回 (TRANSPORTATION)	未定	未定
2月17日			
2月24日			